

呑まれた話を挙げている。

＜陸上から発見されることについて＞は、「そのものの海沙中、或は石中より出るは螺蛤魚蟹（ツブハマグリ）の化石と同理にして、さのみ奇怪とするに足らず。」として貝やカニも出るからサメの歯でもおかしくない、としている。

『松平芝陽の結論』

まずは「鯨の牙に決定しかるべきと愚考も同案なり。石亭は蔵石家高名なれども鯨の牙と心つけざるは遺恨なり。」と優越的に述べて＜大きさにについて＞は丹州と同様に 25 間のフカの挿話を入れて自説を補強している。

＜陸上から発見されることについて＞は言及していない。

『大槻玄沢の結論』

「鯨魚牙の化石なりと究めしは疑ふべからざることなるべし。」

＜大きさにについて＞は「その大小種々あり。これ即ちハーインの種族に数品あるを以てなり。」とし論証としては弱い。＜発見場所について＞は「諸國中産するものありと云えども多く地中海中マルタ島より出すというのも、また考えるべきことがある。我方にては殊に能登越後等の地方に多く得るという事もまた相似たることなり。」と直接の論及は避けている。

蘭学者たちの言説の特徴は「仮説」という形で解答を出していることである。そして相性の良い寓話を挿入して仮説を補強している。また、仮説と合わないことに関しては無視するか、留保しているように見える。

聖書に基づいた歴史書ゴットフリート歴史書(1630)のオランダ語訳は当時の蘭学者の間で同等に読み込まれていた。主に訳した人は玄沢の弟子の山村才助(1770～1807)であった。というわけで玄沢も当然読んでいたと思われる。ところがサメの歯が陸上から発見される理由において水の力に全くふれていない。敢えて触れなかったとも考えられる。

〔結論〕

- ・木内石亭の論述はすべての条件を満たす解を求めているために結論を得ることが出来なし。所謂、自然誌の範疇を超えていない。
- ・蘭学者の論述は暫定的でも必ず解答を出すという意思がある。そのために仮説を用いたり、解

答と合わない条件を留保している。

- ・蘭書の記述を相当に信用している。
- ・記述に関して宗教的な事柄を隠蔽している可能性がある。

最後に「天狗爪石拙攷」九州大学総合研究博物館所蔵で九州大学総合研究博物館デジタルアーカイブ掲載のものを参考とさせて頂いた。

12) 吉備大臣入唐絵巻にみる口腔観

Studies On the Kibino-Ototo—Nitto-Emaki and Dentistry

医の博物館 西巻 明彦

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*

「吉備大臣入唐絵巻」は、後白河法皇により制作され、蓮華王院に所蔵されたといわれている絵巻物である。現在、ボストン美術館に所蔵され、四巻残存している。「吉備の大臣入唐絵巻」は「江談抄」を土台としていると言われているが、「吉備の大臣物語」(大東急記念文庫)にも同様な物語が書かれている。内容は、吉備真備が遣唐使船で唐国に到着、到着後すぐに高樓に幽閉されてしまうが、鬼の姿となった阿倍仲麻呂と協力して危機を乗り切り、日本へ宝物を持って帰国するという、どちらかというとい異界へ赴いて宝物を持ち帰るという「桃太郎伝説」に近似したストーリーである。この場合、唐国を異国とみるか異界とみるかという問題が存在する。当時の貴族にとって異国が慕情をとまなう場所であったのか、鬼・妖怪が住む異界であったのかを考えるには、吉備真備の伝説にまで遡らなくてはならない。吉備真備に関する伝説は『公卿補任』(764年頃)『続日本紀』(775年10月2日の条)、『扶桑略記』(735年4月26日条)が基本となっている。吉備真備の本姓は下道朝臣、現在の岡山県出身で、716年に遣唐留学生として遣唐使として入唐した。734年帰国、翌735年に唐国から持参した『唐礼』180巻を始めとして多くの文物を朝廷に献上した。その中には仁和寺に伝来する『太秦』も今日、真備によりもたらされたのではないかという論考も存在している。帰国後、真備は学士となり、下道朝臣を吉備朝臣に改め、その後順調に昇進の道をたどった。752

年、遣唐副使となり 753 年再度入唐するも、日本帰国中に漂流し、屋久島を経由してようやく現在の和歌山県に帰着し、再び朝廷につかえた。766 年には右大臣にのぼりつめ、吉備朝臣と呼ばれるようになり、83 歳の天寿を全うした。ここで特徴的なことは、吉備真備は成功者であり、異国へ赴き文物を日本にもたらし、なおかつ天寿をまとうした点である。小野篁は六道珍皇寺の井戸より地獄へおもむき地獄で書記官をしたという伝説が残っているが、地獄も異界であり、外国も異界であり、この点で共通性を認める。

『吉備大臣入唐絵巻』の中に鬼となった阿倍仲麻呂が登場する。鬼は古代中国においては死者の魂であり、神として祀られる対象であった。しかし古代日本で鬼は超自然的な恐ろしい存在であり、姿を見せない存在であった。しかし平安時代、画像として図示させるはっきりとした存在となって出現する。つまり阿倍仲麻呂の「鬼」は日本の「鬼」であり、口元は裂けて牙が突きだしている点は肉食動物を彷彿とさせる。異国の他者をみる概念は蒙古襲来からと黒田日出男氏は述べていますが、「吉備大臣入唐絵巻」が後白河法皇の政策ならばもっと早い段階で形成されたと考える。

外国というより異界において人に対しどのような口腔観が描かれているかという点、真備自体、引き目鉤鼻技法では描写されていない。眉は細く、眼は引き目より太く、鼻もしっかりと描かれている。残存する『吉備大臣入唐絵巻』の中では真備が 10 回描かれているが、開口している絵図はひとつもない。これに対し唐国の皇帝は開口している場面が存在し、唐の皇帝と吉備ではその尊厳では吉備の方が上であると制作者が考えていたのではないかと推察される。口を開けるという行為は平安時代貴族にとってはどちらかと言うと下品な行為と考えられていたと思われ、このことが作用したのではないかと考えられる。また全体に流れるイメージは唐国というよりも異界であり、唐の皇帝というイメージよりも異界の王と言うイメージが絵師に強かったと考える事ができる。

『吉備大臣入唐絵巻』は実話というよりも「桃太郎伝説」に似た成功物語の説話で、真備そのものも、制作当時の貴族が考えたイメージは異界へ赴く武士的側面が強く、そのためさまざまな術をろうしたと考えられる。開口描写が無い事は、武士

的行動をとったとは言え、貴族の要素を失わず、貴族としての威厳を保つため開口しなかったのではないかと推測することができる。

13) 緒方春朔にみる中国伝統医学

Studies on the Ogata Syunsaku and Chinese traditional medicine

医の博物館 西巻 明彦

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*

蘭学における医学上の最大の功績といわれているものが、ジェンナーが開発した牛痘種痘法である。1849 年、モーニッケのもとらした痘苗が善感し、この方法が全国に急速に広まっていった。このことは当時の交通事情を考えると、近代交通が一般化するのとは明治以降で、19 世紀中頃の場合は徒歩・船・馬によるのが一般的である。しかし船による運搬は大量輸送には適しているが危険度が高く、風待ちによるロスも多く必ずしも安全確実なものではない。基本的には人に頼る運搬が主体で、痘苗も人による伝達が主体であった。急速な牛痘法の普及はそれを普及させるためのネットワークが全国に存在しないと実現は不可能であり、それ以前の人痘法によるネットワークがその基盤になっていたと今日考えられる。

天然痘予防法は今日、人痘法と牛痘法とに分けられているが、人痘法はアジア地域でその発展をみた。西アジア地域では痘苗に痘漿を用い、ランセットで手に接種を行う方法でトルコ式とも言われ、これはヨーロッパに伝わった。一方東アジア地域では、さまざまな方法が行われ、『医宗金鑑』(1742)の中に水苗種法、早苗種法、痘衣種法、痘漿種法が記載され、これらの方法は 1744 年、李仁山が長崎に来て種痘を伝えたという。

日本において人痘法の普及に大きく力を尽くしたのは緒方春朔であり、4つの方法のうち天然痘の痂皮を乾いたまますり潰し、へらで鼻孔の前に乗せて吸い込ませる方法を行った。1790 年 2 月 14 日大庄屋天野甚左衛門の子供 2 人に種痘を行い成功させた。当時の秋月藩は伝染病の流行、害虫の発生により死者が続出し、人口が 1/10 に減少したと言われている。人々にとってはまさに